

「おれが釣り好きなのは4万年前からのさ」

出アフリカの本当の理由

●朝日新聞の11/25付に次の記事が載った。  
 一^人類、4万年前から釣り? 東ティモールで釣り針発見 人類は4万2千年ほど前から、高度な漁法でマグロやカツオを釣っていたらしい。オーストラリア国立大と東海大などの研究グループによる南太平洋の国、東ティモールの遺跡調査から判明した。25日付の米科学誌サイエンスに発表する。

人類は5万年ぐらい前から舟で外洋航海をしていたらしいことがわかっていて、1万2千年前ごろから漁をしていたらしいこともわかっている。チームが海岸から1、2キロ、標高50~100メートルの地点にあるジェリマライ遺跡の出土品を調べたところ、4万2千年前のマグロなど外洋魚の骨のほか、1万数千年以上前のものとみられる貝でできた最古の釣り針が見つかった。、一

●本誌第75号の特集◎「釣りバリの進化論」で触れたように、これまでは、約3万年前のウクライナ後期石器時代遺跡から出土した釣りバリが最古だとされていた。見出し通りならさらに1万年さかのぼることになる。しかも発掘場所がインドネシアは東ティモールとは、夢をかきたてられる。

●最近の研究によれば、人類の祖先は今から700万年前の中央アフリカ・チャドに棲んでいたサヘラントロプスとされる。400万年前にアウストラロピテクス属(猿人)が現れ、250万年前にそこから分岐するかたちで、現世人類につながるホモ属が出現する。さらに200万年前にホモ・エレクトゥス(原人)が出現し、アフリカを出る。今につづく人類の旅路はここから始まったわけだ。

●アフリカを出たホモ・エレクトゥスの一部は100万年前に現在のインドネシアに到達。アジアの温暖な気候の中で、ハンドメイド石器を使っのんびり(?)暮らし始める。食物は果物や小動物で、魚も獲ったに違いない。魚を獲っていたならば、原人の中には物好きなのがいて、「いっちょこの魚となんかの糸でつながったらビクビクして面白いんじゃないの」と思ったとしても不思議じゃない。そういうことにおこ。それが釣りの始まりだ。

●原人と現世人類のホモ・サビエンスとは血のつながりはないらしいが、それはそれとして、つまり人類の祖先は、じつは釣りがしたくて出アフリカした(無理やりだけど)。すごいじゃないか、釣りびと。

●ちなみに紀元前2000年の古代エジプト

壁画には、王族らしき人が竿先で羽虫を操っている釣り姿が描かれている。これが記録に残る最古の毛鉤釣りだとされる(第75号特集参照)。フライフィッシングもすごいじゃないか。



朝日の記事には約1万1千前とキャプションのついた「し」の字型の釣りバリしか出ていなかった。「し」の字型はまっすぐな「直針」から進化したのではないかと。東ティモールのはどうだったのか。気になる。



『フライの雑誌』第75号特集◎「釣りバリの進化論」。顕微鏡は見た!各社のハリ先を顕微鏡でじっくり観察/釣りバリのふるさとを訪ねて 播州探訪記/針屋彦兵衛ここにあり 釣りバリ作りにかけた一生/釣りバリの考古学 北相木人を知っていますか?他

フライの雑誌社 facebook ページが人気です

遊び道具は多い方がいい?

●ソーシャルメディアが爆発的なひろがりを見せている。時流に乗って、フライの雑誌社もfacebookページを開いた。さいしょはぜんぜん使い方が分からず、いまでもあまり分かってないが、絶賛稼働中。誰でも見られるし、どなたでもコメントを書き込める。「いいね!」ボタンやコメントなど、自由に遊んでください。

●ずいぶん昔、ソーシャルメディアなんて言葉も知られていなかったころ、『フライの雑誌』のホームページにはBBS(掲示板)があった。ゆるく和やかにもりあがっていたが、あるとき、ひとつの書き込みから騒動がはじまった。

●その書き込み自体は問題があるものではなかったが、匿名だとか関係ない外野ほどおしゃべりになる。あつというまにブワツと尾ひれがついて燃え広がった。そのうち掲示板のCGIが原始的なサイバー攻撃を受けてオーバーフロー。脇の甘いハッカーで攻撃してきたIPは丸見えだったとはいえ、いろいろ面倒になって、それを契機に掲示板

は閉鎖になった。

●あれから15年近くたって、ネットをとりまく環境もずいぶん変わった。しかし情報環境がいくら進化しても、釣りの楽しみはまったくかわらない。むしろバーチャルが深まるほどに、水の冷たさ、風の匂い、土のぬくもり、魚のきらめきの魅力はどんどん輝いて、私たちをどうしようもなく釣り場へと誘う。

●12月現在、フライの雑誌社facebookページには、クロスオーストリッチのタイ

ピング動画、鹿児島の中馬さんのカマス釣りの動画(これは必見)、編集部で飼っているクサガメとミドリガメのプロマイド写真などをアップしている。〈あなたの釣ったぜ!な音楽を教えてください!〉という企画も進行中だ。You Tubeの動画リンクを直接貼れるので音楽誌をするにはとても便利だ。

●フライフィッシングを楽しく遊びましょう。『フライの雑誌』がそのちょっとしたお手伝いをできればうれしいです。



facebook フライの雑誌 公式 facebook ページ  
 フライフィッシングとネットの親和性がここまで高いとは、15年前にはまったく想像もできなかった。第63号と第64号にジャーナリストの片山哲也さんが「フライフィッシングとインターネットの幸せな未来のために」と題したユニークな考察を発表してくれていたのを思い出す。いま読みかえすと深い

釣り人の声が行政を動かした：東電福島第一原発事故放射能被害

「安全だから検査しません？」

●冬を迎え、ワカサギ釣りシーズンが本格化してきた。ワカサギは釣って楽しい、食べて美味しい、家族連れのレジャーには最適だ。福島の原子力発電所から降った放射性物質により、群馬県赤城大沼のワカサギから640ベクレル/kg、神奈川県芦ノ湖のワカサギから71ベクレル/kg、栃木県中禅寺湖のワカサギから175ベクレル/kgのセシウムが検出されている。

●関東のワカサギ釣りといえば山梨県富士五湖が有名だ。河口湖、山中湖、精進湖、西湖、本栖湖、どの湖でもワカサギ釣りができる。だが9月中旬現在で山梨県は放射性物質検査をしていなかった。編集部が電話で理由を聞いたところ、以下の返答だった。「隣接県の状況の推移を見守っているが、今のところ山梨県は安全だというのが山梨県の認識だ」（農政部花き農水産課）

●しかし山梨県の対応は明らかにおかしい。ワカサギからは放射性物質が出やすい。関東一円で放射性物質が広がっているのが明らかな現状で、ただ「安全です」と言われても根拠がない。編集部では「釣り人ですけど、富士五湖のヒメマスとワカサギの放射性物質検査をしてください」と山梨県へお願いしようという呼びかけを、ウェブサイト、facebook、twitter上で行った。するとすぐにたくさんの読者の方が山梨県へ

電話やメールなどをお願いしてくれた。

●そこでは例えばこんなやりとりがあった。「釣り人ですが、富士五湖のワカサギの放射性物質検査をしてください」「隣県で検出されれば山梨も検査します」「芦ノ湖のワカサギから出ていますが?」「国の基準の500ベクレルを超えていますから」…

木で鼻をくくったような態度とはこのことだ。釣り人が困ったときの国の窓口である水産庁釣り専門官（TEL.03-3502-7768）にも相談したところ、状況を理解し、山梨県担当者と折衝することを約束してくれた。

●11/25、山梨県が県のHPで「県産農産物の放射性物質検査品目を追加する」ことを発表した。その中には「ヒメマス、ニジマス、ワカサギ」が入っていた。釣り人からの働きかけが大きく寄与した結果だろう。（調べるべきものを調べる）、たったそれだけの当然の仕事を行政にしてもらうのに、どうしてこんなに時間がかかり、釣り人が苦勞しなければならないのか。

●11/29、山梨県内淡水魚の放射性物質検査結果がHP上で発表された。西湖ヒメマスの放射性セシウム26Bq/kg、本栖湖ヒメマスの放射性セシウム29Bq/kg、山中湖ワカサギの放射性セシウム13Bq/kg、精進湖ワカサギと富士吉田市の養殖ニジマスの放射性セシウムは不検出だった。



富士五湖の内、なぜか河口湖だけは一品目も検査していない。この中途半端さはなんだろう。写真は山中湖ワカサギ釣りドーム船

●山梨県は報告書の中で「県内の湖で採取したヒメマスとワカサギで放射性物質が検出された（精進湖のワカサギを除く）が暫定基準値を大幅に下回っている。」と書いた。しかし「大幅、かどうかは大きなお世話で、行政が言うべき言葉ではない。そこから先は、情報を受け取った人それぞれが判断することだ。

●山梨県は「安全だから検査しません」と言って検査を拒否し続けてきた。多くの人からの突き上げを受けて、ようやく検査した結果がこれだ。測って出てくる放射性物質の数値は気になる。しかし、大事なことを市民から隠そう、ごまかそうとする行政の悪質はより根が深い。それこそが、まさに3.11以降の原発事故へ対するこの国の基本姿勢であり、「風評被害」を生んでいる大元である。（堀内）

人工産卵場作りは楽しい …次の一手へ

産卵場作って温泉入って釣りもして

●9/23、長野県信濃大町の高瀬川で、北の安曇野渓流会企画による「2011信濃大町テンカラミーティング&講習会」が開かれた。ふた昔前の高瀬川は魚影濃く、大型魚も数多くいた。ところが上流のダムや森林の荒廃、釣り人の増加などの影響でかつての豊かさは見る影もなくなっている。何とかしたいとの思いで、全国から約50名の釣り人と地元漁協組合員が参加した。会場は高瀬川沿いの名湯蔦温泉。

●初日、単行本「イワナをもっと増やしたい!」著者の中村智幸氏のレクチャーの後に、翌日は中村氏の指導で実際に高瀬川の本支流ヘイワナ・ヤマメの人工産卵場の造成を試みた。小沢だったために人間のほうが列をなすほどの盛況だった。地元新聞の取材もたくさん来ており、人工産卵場が日本にすっかり根付いたことをつよく感じた。中村さんによると人工産卵場の「次の一手」があるとのこと。近々に記事にしたい。

●このイベントへ誘ってくださったのは、本誌にも何回か登場して下さっている本誌読者で長野県飯田市在住の塩澤美芳さん。二日目の早朝、塩澤さんと同行の釣り人二人とで、高瀬川の渓谷を釣った。塩澤さんはかつてこの川へ通い詰めたそうだ。



イワナをもっと増やしたい!

中村智幸=著  
フライの雑誌社新書  
第2刷発売中  
1200円(税込)



高瀬川を釣る塩澤さん。熟練の釣り姿

御年81歳で我々の先頭をきってヤブこぎラッセルするわ、大岩をひよひよいと乗り越えて毛鉤を振り込むわで、たいへんにかっこよかった。（堀内）



地元の子供や漁協組合員も多数参加した人工産卵場造成の実演